

# 敬愛する高橋隆雄先生の思い出

小松 啓一郎, Ph.D.

## 1. 「文」転ではなく学際

高橋隆雄先生は私より6つ歳上の先達であり、穏やかで大らかなお人柄の研究者ですが、学問的には妥協を許さない厳格な姿勢も貫かれるお姿が印象的でした。哲学の中でも倫理学の基礎づけと応用倫理学を専門課題にしておられましたが、あくまでも広い視野と深い学識に基づく学際的な研究を前提とするものでした。

東京大学工学部を御卒業後、そのまま東大大学院の博士課程でカントやヴィトゲンシュタインなど西洋哲学を専攻されましたので、あたかも理系から文系に転じたかのようにも見えます。しかし、先生ご自身曰く、「理系で学んだ数学的な論理手法を哲学研究の中に取り入れて新しい思考手法を構築したかった」とのことでした。単に理系から文系に「転じた」のではなく、理系から文系に研究視野を拓けることで学際的な手法を積極的に拓かれたのです。

## 2. 邂逅

熊本大学で教鞭をとりながら業績を積まれた高橋先生はオックスフォード大学客員研究員として英国に滞在されましたが、その時期には私も東京やニューヨークでの金融機関勤務から研究生活に入り、オックスフォード大学で博士課程に在学していました。高橋先生ご夫妻には気さくに夕食に招いて頂き、妻の久美子と共に度々御自宅にお訪ねして学問上の示唆に富んだお話を聞かせて頂きました。

## 3. 留学先の日本近・現代研究状況

当時の英国では、中世までの日本に関する研究こそ進んでいたものの、近・現代の日本研究という分野では米国に比べて遅れているともされ、オックス

フォード大学でも同分野の指導教官には英国人が殆どおられないという状況でした。英国では学問の領域に限らず、各種の報道内容を見ても、日本の文化や国民意識が欧米に比べて遅れているとの暗黙の前提があり、日本人はもっと欧米式の考え方を学んで意識改革に努めるべきだと言わんばかりの論調が多く見られました。

## 4. 助言を得て袋小路から脱出

そのような状況の中、第二次世界大戦時の日米英開戦（1941年12月）の原因を研究課題に選んだ私は、もともと開戦回避を目指して続けられていた日米交渉中に米国側で多数の誤訳・曲訳が生じていたという残念な事実を知りました。それを誘引したのが両国間の深刻な認識ギャップであり、交渉失敗への主因にもなったのではないかとの考えを抱いた私は、認識上の歩み寄りがあれば避けられたはずの戦争であったとの結論に至る博士号請求論文を執筆中でした。従って、誤訳問題のみならず両国間の文化的な価値観の差異についても分析を試みていたのですが、近・現代日本の哲学的・社会的な価値観を単に前近代的なものとして決めつけて蔑むかのような英国側の圧倒的な「上から目線」の風潮に気づき、行き詰っていました。

高橋先生ご夫妻の前でその悩みを打ち明けた私は、近世日本に属する徳川時代の思想家の中から鈴木正三、熊沢蕃山、山片蟠桃らを持ち出し、彼らの考え方が現代日本人にも無意識のうちに影響しているのではないかとの私見を開陳した上で、英国においても彼らの再評価が必要なのではないかとの疑問を提起してみました。

これに対し、高橋先生は日本人研究者の間でも西洋の哲学的・社会的価値観のほうが一方的に優れているという前提で「下から目線」に偏った立場があるとし、「違和感を覚えている」とコメントしてくださいました。このお言葉に勇気づけられた私はそれまでの行き詰まりを突破することができ、論文の完成に繋がられたのでした。

## 5. 求道者・高橋先生の昼下がりの閃きと述懐

帰国後の高橋先生は 2008 年の著書の中で英国滞在中の経験に触れ、「ある日の昼下がり・・・ひとり日本思想に関する文献を読んでいるとき大きなヒントをつかんだ。・・・[日本思想と]自分の立場との類似性に心を奪われた」として、学問的関心が西洋哲学から日本思想にも広がった経緯について書かれています。

現在も英国在住の私は 2016 年に高橋先生の御招待を受けて熊本大学大学院博士課程対象の HIGO プログラムの一環で久しぶりに九州に赴き、市内の先生の御自宅に久美子共々お招き頂いて夕食を御一緒する機会に恵まれました。その折、先生から「あの昼下がりの経験は、熊沢蕃山や山片蟠桃らの話をしていた小松さんとの会話から生まれた閃きのことです」と聞かされて驚きました。かつて、高橋先生のお言葉が私の論文完成への原動力になったのとは別の意味で、先生もまた若輩の私との会話の中に研究上の大きなヒントを見出されたという事実を 20 年以上も後になってから知ったのでした。

既に大きな業績を築かれていた高橋先生であつてもなお、日常の中であらゆるヒントを見落とさない求道者のようなお姿に頭が深く下がりました。

いつも笑顔で支えてくれた妻久美子は 2018 年に逝去し、今また高橋先生が闘病の末に逝去されてしまいました。あのような日々は二度と来ないという無限の寂寥と心細さを感じている私ですが、目指す方向は明確に示してくださった先生の背中を見失わないように目を凝らし、あの広いお心を思い出しつつ、これからも謙虚さと探求心を失わないで歩み続けていきたいと決意を新たにしております。

高橋隆雄先生の御冥福と心暖かい高橋家の皆様の御多幸を切にお祈り致しております。

(Dr. Keiichiro Komatsu, Principal, Komatsu Research and Advisory, UK)